

# 津軽の虫の巣

宮本百合子

青空文庫



朗らかな秋晴れの日である。

津軽の海は紺碧こんぺきに凪ないで、一点の曇りも無い虚空を豊かに照

り返えす水の上には、これはまた珍らしく漁舟の片影も無い。

閑静に澄んだ波の面には、微かに動く一二羽の水鳥が、大らかな弧を描いているばかりである。

けれども、若し人がその海岸に立って、遠い彼方に瞳を定めたならばきつとその注意は、遙か水平線の上にポツツリと浮き出して小さい物の影に牽ひかれるだろう。

影は紛れも無い二艘の船である。

微かながら、それ等の船は、真上の空に舞う水鳥の、翼の白さにも擬<sup>まが</sup>う真帆を一杯に張つて、静まり返つた水面を、我物顔に滑べつて来るのが認められる。

小豆粒ほどの影は、次第に大豆ほどとなり、やがては小人の船ほどの大きさになつて、耳を澄ますと、微風につれて賑わしい船歌さえ聞えて来る。

この二艘の大神こそ、誰あろうときの大守、十代津輕矩広を乗せて、三馬屋の泊から船出した、長者丸、貞松丸という吉例の手船なのである。

歴代の津輕公は、参勤交代で江戸表への上下には、必らずこの

二艘の手船で、津輕の海を超える慣例になっている。

今度も、江戸表から、久しぶりに帰城する矩広を乗せて、二艘の船は悠々ゆうゆうと晴天の下に浮んだのである。

御手船が見えたという報告は、今まで深い眠りに入っていたような城下を、一時にハッと目醒ました。

急に騒然と人気立った要所要所にやがて一刻も過ぎた頃、船はつつが恙なく定めの船泊りに着いたのである。

海上無事を知らせる合図の篝かがりが、傾きかけた大空を画って、白上峠の頂上から華々しく燃え上った。

すると、暫らくの間を置いて、それに応える「清八」の狼煙のろしが、南部三馬屋から仄かに立ち昇る。

美くしい火の応答が、燦めく海を隔てて取り交わされる間に、一行は威儀堂々と、上の奥の城へその長い行列を大々しく繰り込むのである。

かようにして、御帰城になる殿様と奥に戻つて来る江戸の風聞は、留守居の者共に絶大の期待を与えているのは、言わずもがなのことである。

直接国政とは何の関係も無いいわゆる「女子供」は勿論、正直に言わすれば若士の大多数にとつても、当時彼等の憧憬の的である江戸の土産は、重大な価値を持っている。

まして世は、繁栄はこれが頂上で有ろうという元禄である。

俄に勃興した江戸歌舞伎の、心を嚇る団十郎の妙技、水木辰之

助の鎗踊、それに加えてさらに好事家の歎賞を恣にする師宣の一枚絵は、たとい辺土とは言いながら、津輕の藩中にもその崇拜者を持っている。

良人の留守を守って、心怠りの無かつた女達が、私に与えられる南蛮渡りの象牙、珊瑚珠、天鵝絨の小帶を、仄暗い燈台の陰で人知れず眺める喜びと、一蝶の戯書を同好の士に誇る老臣の喜悦とは、その間に必しも大小はない。

当座は、身柄相当に四辺を潤おす土産話に、冬近い北国の城下はときならぬ陽気に蘇返った賑いを見せたのである。

けれども、やがてはそれも耳古りて来ると、今迄どこかの隅に逼塞していた、江戸表の噂も、こんどは施政の是非が人々の口に

喧しく批評されるようになって来た。

それも在り来りのお家騒動やお白州事ではない。

お大名の間には、由々しい大事として、目下取沙汰されている  
当代綱吉公の、生類憐愍れんぴん愍みのことに就てなのである。

## 二

始め、天資英明の聞えが高かった綱吉が、彼の初政に布いた善政は、長く諸人の胸に留まっていたので、生類憐愍の令も、或る程度まではいくらかの同情をもつて、寛容に観られていたでもあらう。



しかし、歳を経るに従つて、法令は益々出て益々奇怪至極なものとなつて来た。

たとい公方様のお達しとはいえ、僅か自分の怪俄で死んだ小猫一匹のために、歴とした武家一族が、八丈嶋へ遠嶋とは、余りといえは存外ではないか。

また近くはつい先頃、江戸の小鼓では押しも押されもせぬ一代の名人観世九郎が、鬱晴らしについて何心なく羽田の沖に釣糸を垂れたばかりに、不愍にも船頭もろとも欠所遠嶋仰せつけられたという、驚くべき例もある。

知足院の隆光とやらいう怪僧がまんまと大御台様を始め大奥ぐるみけんに掛けて非道の御布令を出させたのも、結句は隆光の

計画である。見い、あの悪くさげな僧姿を、高麗あたりからの牒まわしもの

者わしものがこの大和国を乱しに来おったのではあるまいか、等という流言は至る処かまに喧かまびすしかつた。中でも例年献上品の重きをなしてた鷹を止めたのみならず、獵師を殺生の業として禁ぜられたことなどは豊作の乏しい藩にとつてはこの上も無い痛手である。

たとい密々に方便はあろうとも、畜生に代えて人の命を輕かろんずる禁令は上下の憤懣ふんまんを起さずにはおかない。

絢爛けんらんたる当代の文明に対しては、余りに暗澹あんたんたる怨嗟えんさの聲

は、遠い僻鄙へきひの地にも絶えなかつたのである。が、藩公の力では

いかんとも為し難い常軌を逸した大偉力の前に、諸侯はただ戦々きようきよう

惴しづ々として、ひたすら平穩に一日の過ぎることを祈つてゐる

かりである。ところが、いつとは無し藩中には、津軽の虫の巢御吟味という風説が立ち始めた。

誰も出所を知る者はない。が、その噂取り沙汰は、知らぬ者は無いほどの速さで、人の口から耳へ、耳から口へと語り伝えられたのである。

中には、何、ただの噂だろうと、さしたる注意を向けぬ者もあった。が、その風評は単に巷説に止まらず、事実津軽の城中では、それに就て事々しい評約が行われていたのである。

さてそれなら、左様に物議を醸した津軽の虫の巢とは、一体何をいうのだろうか。

津軽の虫の巢は珠である。ただ一顆の輝やく珠玉である。蝦夷

地交易品の目録の中には青玉と記るされているその別名である。

晴やかな青紫の円い小珠は、滑らかなその面を日に透すと、渾然たる瑠璃色るりが、さながら瞳の底、魂の奥へまで流れ入る。

人々はその光彩を愛でて珍重したのである。

ところがこの青玉が、ただそれだけのものであつたら何も面倒を惹き起さなかつたのだが、珠は名に反かず、他の玉石の持たないものを持つてゐる。

津軽の虫の巢は、その融けんばかりの瑠璃色のうちに、必らず小さい白い泡沫ほうまつを二つ三つずつ包み込んでるのである。それがまたいかにも見る人には可憐なのである。丁度何か名も知れぬ小虫が、涯はて知らぬ蝦夷の海の底深く、珊瑚の根元にでも構えた巢の

様に思われる。翳<sup>かげ</sup>してその色の麗わしさを愛ずる者は、自ずと広大な海原を思わずにはいられない。

海原を思えば、海松のうちなびく魚族の王城を思わずにはいられない。日夜潮鳴る海を抱いて、遠く都を隔てた人々の胸に、この珠の名はいみじくもまた懐かしく響いたのである。

しかし、鞆<sup>さや</sup>の下地に使う「さび皮」まで、馬の皮ならば紙で下着せを仰せつけるほどの厳しさは、決して物を風流では許さない。

若し名目の通り虫の巣ならば、今まで通り献上などとは以ての外である。のみならず城中の使用も差し控えねばならぬことになる。お家大事と寧日も無い老臣達は、上への聞えを憚つて、遂に今は一刻の猶予もならず、何とも知れぬ津軽の虫の巣を諸人環視

のうちに吟味することに決したのである。

### 三

その日城内の大広間には、中央に矩広を始めとして、式服に威儀を正して家臣の誰彼が、何とも知れぬ心の張りを覚えながら、肅然として居流れていた。

上座る諸人の胸には、数個の虫の巣が、問題の泡沫を麗わしくは、  
玻璃に浮かせて光ってる。

人々はそれを白扇の上から上へと廻わしながら、物々しくその愛すべき小球の吟味に取り掛ったのである。

或る者は私ひそかに無臭の珠に鼻を当てて見た。また或る者は仔細らしく小首を傾けながら、濃やかにも粹緻なる肌に爪を立てて見た。

が、しかし分る者は無い。或は分る者が無いと云うよりはむしろ、分らせようとする者が無かったという方が適當かも知れない。何故ならば、彼等武士の一言という者は、直に懸つてその生命に在る。仮に分るとしても、僅かな自信はどうてい後難おもんばかりを慮る責任感を減ずるだけの力はない。

指名されてその意見を徴された者は、皆丁重な平伏と謙遜な辞退とをもつて、彼の浅学はどうていその任に堪えないことを陳のべる。

数個の珠は空しく、扇から掌へ掌から扇へと転々するばかりで、今はその玲瓏<sup>れいろう</sup>たる紫色も、人肌のぬくもりで微かな曇りさえ帯びた様に見える。

皆は軽い倦怠を覚えながら、端然として無智な瞳を見開いていたのである。

ところが、時の家老の蠣崎某は、いかほどこの状態を延引したところで彼の求むる結果とは余り遠いことを知ったのであろう、彼は終に一案を呈出した。それはこうである。

元来火という物は、神代の昔から万物の不浄を潔め、邪氣を払う物とされている。それ故、この珠をも火に焼いて、若し色も変らず、悪臭も放たなかったら、それは穢ある虫の営んだ巢ではな



い。今はただ火によることの外は、この不思議な小珠の本体を知ることができぬと云うのである。

彼のこの一言をひたすら待ち構えてた諸人に異議のあらうはずは無い。御家老のあつぱれ名案として、一議なくことは決して、立処に一抱いに余る大火鉢が、一座の中央に持ち出された。火鉢には紫焰を吐いて燃え熾<sup>さか</sup>る炭火が面をも焦すばかりに盛つてある。矩広に一礼すると、白髪<sup>うやう</sup>の老体を鞠躬<sup>きつきゆう</sup>如<sup>うじよ</sup>として蹣<sup>にじ</sup>り寄つた。蠣崎某は、恭<sup>うやう</sup>やしく懷中から取り出した白紙を口にくわえると、いかほどの大事を成し遂げたる様、決然と眉を挙げ、一粒の青玉を　のうちに投じたのである。

火花を散らす様にして、赫<sup>かくかく</sup>々と燃え立つ真紅のただ中に置か

れた一顆の青玉は、さながら天外から雫<sup>したた</sup>り落ちた一滴の涙の様に  
見える。

純粹無垢の 色に燃えて、るりは一層るりに、滑らかな肌を滑  
つて舞う は灼熱の花弁となつて青紫の 玉<sup>ぎよくずい</sup> 蕊<sup>い</sup>を抱いて揺曳<sup>ようえい</sup>  
する。

その美しくしさに思わずも恍惚として我を忘れた人々の目前で、  
焙<sup>あぶ</sup>られた珠はやがて微かな音を立て始めた。珠の小ささにも似た  
ひそやかさである。響きともいえぬ響である。が、その優さしく  
耳底に通う響に連れて青玉の渾然たる面には、蜘蛛手の罅<sup>ひび</sup>が入り  
始めた。

そして、息もつかせず珠一面を包んだと見る間に、サツクリと

ばかり　のうちに珠は潔くも砕け散ったのである。

散りながら、なお依然として大空を照り返す、華麗なるりの小珠を白扇の上に掻き集め蠣崎某は、優雅な哀愁に胸を鎖されながら矩広の御前に平伏した。

かようにして問題の津軽の虫の巢の御吟味は終わった。

当時松前の藩中には、この珠を支那で青琅玕せいろうかんと呼ぶのを知る者が無かつたのであろうか？

このときの結果を、愛すべき昔の記録者はこう書いている。

### 青玉の事

カラト嶋の方、北高麗より渡り申す由なり。蝦夷地には無之候。

津輕の虫の巢等と申せども、なかなか此地よりも出不申候。中略。  
先年松前にて色々吟味あり、練物の相見え申せども何にて拵  
へ申候や相知れ不申候。

評議の上にてために焼きて見申候へば、砕け候へど色はなか  
く少しも変り不申候。虫の巢など申伝へ候は偽に有之候。云々。

# 青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第一巻」新日本出版社

1979（昭和54）年4月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第一巻」河出書房

1951（昭和26）年6月発行

入力：柴田卓治

校正：原田頌子

2002年1月7日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 津軽の虫の巣

宮本百合子

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>